



丹波育児院

～辻原光治とその周辺の人々～

第15回

保井谷の山内成太郎

今回は、山内成太郎（一八六二～一九二三）を取り上げます。

山内成太郎は、京丹波町保井谷出身で、三ノ宮村長などをつとめた後、北海道へ渡り、肥料商「丹波屋商会」を創業した人物です。

丹波屋は二〇二二年現在、年商五五億円、従業員二四六人、札幌に本社を置き、肥料資材関連で国内有数の総合商社に成長しています。

辻原と山内は、やはりキリスト教を通じて交流がありました。『開拓者と使徒たち』が丹波教会松山部の「いづれ劣らぬ信仰の持ち



山内成太郎(1862～1923)

主」として「辻原光治、中川道之助、太田栄之助、山内成太郎、沢田庄六等」を挙げていたことは、すでに述べたとおりです(第5回)。

一揆が押し寄せた生家

山内の生家は、酒造業を営んでいたとされます。成太郎は文久二年（一八六二）生まれですが、その二年前には「万延の一揆」が起こり、現在の三和町（福知山市）から京丹波町・南丹市を騒然とさせました。

万延元年（一八六〇）十一月十四日朝、一揆勢は井脇から保井谷へ至り、酒屋九郎兵衛方へ押しかけました。しかし、この家は「近年来不仕合せがあった」として断りを申し出て、酒食をふるまったので打ち壊しを免れました（八田村庄屋卯兵衛「乱法一条記」）。

この酒屋が山内の生家であり、九郎兵衛は成太郎の父か祖父に当たるのではないかと思われます。

明治二二年（一八八九）、山内は二七歳で酒造業を継ぎました。また同年、町村制が実施され三ノ宮村が発足すると村会議員に選出されます（同僚議員の中に辻原の父清之丞もいました）。その後助役を経て、二九年から村長に就任します（同時期の須知村長は明田吉五郎でした）。

村長時代には「貧窮した状況の打破に心を砕き、村内に貯金箱を回し日掛貯金を奨励した。当時はその日の稼ぎの大半を酒につぎ込み生活のうさを晴らす人も多く、その予防をも兼ねた策」で、「多くの家庭で歓迎」されました（「丹波屋」創業97年の肥料問屋「網島不二雄」）。

留岡幸助牧師に感銘

同じく二七歳のとき、前年九月から丹波に赴任していた留岡幸助牧師の伝道に出会い、感銘を受けます。

このころに洗礼を受けたとすれば、二三年三月九日に須知会堂で辻原や波多野鶴吉が受洗したのと同じときだったかもしれません。

『丹波基督教会史』には二三年七月と八月に保井谷で説教会が開かれたという記録があり、会場は山内家だったと思われます。二四年十月十八日には「保井谷村信徒山内成太郎氏、親戚村民を招き、祖先追悼記念会を催し、この好機に伝道師を聘して基督教を大いに宣伝」とあります。

辻原光治が周旋委員長として活躍した三二年三月の須知会堂での連続祈祷会に

は、山内は「米三斗」を寄付し、同時に開催された総会

では「基本金積立」をするこ

とが決議され、山内は谷平吉、谷口嘉平とともに「保護人」に選出されています。

信徒となった山内は、それまでは大酒呑みだったに

もかわらず禁酒を誓い、酒造業を廃して牧畜業に転

じます。このあたりは、酒造業を廃して酒蔵を須知会堂に寄付した前田英吉とそ

「百年史」（二〇一五年同社刊）は「北海道開拓に憧れを抱いて」としていますが、尊敬する留岡牧師をはじめ前田英吉（須知）、田中敬造（綾部田野村）、小北甚之助（亀岡）、西田新蔵（胡麻）ら丹波教会関係者が先行して渡道していたことにも心を動かされたのだろうと思われま

と共同で「必富殖産合名会社」を起こします。資本金三万円、「農業澱粉製造販売及馬鈴薯販売」を目的とする会社でした（商業興信所「日本全国諸会社役員録」明治四十年）。

肥料商「丹波屋」を創業

当時旭川は陸軍第七師団が置かれるなど活況を呈していました

山内は町の盛衰は軍隊ではなく農村の繁栄にあると悟り、反対を押し切って肥料商へと踏み出します。

同年十月、個人で旭川に肥料卸商「丹波屋商会」を設立、翌年、日本の肥料製造の先駆けであった兵庫県加古川の多木肥料（現・多木化学）と特約店契約を結び、北海道で過リン酸肥料を一手に販売する権利を得ます。

農民に共同購入を奨励し、

代金は出来秋払いとする方策が支持され、事業は順調に伸展していき

多木肥料は、明田吉五郎が須知を離れた後に入った会社です。特約店契約に際して何らかの関与があったの

大正三年には旭川に区制が施行され、山内は納税額最多の階層から区会議員に選出されています。

同七年には小樽に支店を開設、その前年合資会社に組織替えしたのを機に山内は社長の座を次男英二の妻の兄、滋賀県出身の佐野啓次郎に譲りました。

第一線を引いた山内は、禁酒運動などの社会活動に専念しますが、大正十二年（一九二三）、病を得て神奈川県茅ヶ崎の南湖院にて六一

歳で逝去しました。

同年、英二が三代目社長に就任しました。

丹波への寄付と追悼会

山内は度々丹波教会に寄付をしています。三四年の離丹時はもちろん、移住五周年の三九年と十周年の四四年にも多額の寄付があり、教会はその都度「受納法を相談」しています。山内死後の大正十三年九月二五日には、丹波教会は亀岡会堂で追悼会を開催しました。

留岡幸助「家庭学校」の寄付者名簿にも明田重次郎や芦田謙造、西田新蔵、辻原光治らと並んで山内成太郎の名前があります。

これらを考え合わせると、山内成太郎は、辻原光治の「丹波育児院」にも何らかの支援をしていたのではないのでしょうか。（山下幾雄）

北海道旭川へ渡る

山内が一家を挙げて北海道へ移住したのは、明治三四年八月でした。『丹波屋

三八年には醸造業と牧場を手放し、上川郡比布村の四七〇町歩に前記の田中敬造、小北甚之助、西田新蔵